



Title	在独トルコ人労働者から移民への変容過程に関する研究：トルコ人ディアスポラ文学研究序説
Author(s)	山尾, あおい
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/58754">https://hdl.handle.net/11094/58754</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href=" <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> ">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	山 尾 あおい
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第 26 号
学位授与年月日	平成15年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	在独トルコ人労働者から移民への変容過程に関する研究 —トルコ人ディアスポラ文学研究序説—
論文審査委員	主査 教授 高階美行 副査 教授 勝田茂 副査 教授 西村成雄 副査 助教授 大澤孝 副査 民族学博物館教授 松原正毅

## 論文の内容要旨

現在ドイツにおいて、トルコ人は200万人を超える最大のマイノリティー集団を形成しているが、彼らが渡独する契機となったトルコと当時の西ドイツ間での雇用双務協定締結は1961年に遡る。以降今日に至るまでの間に、トルコ人は短期滞在の労働者から定住化し、やがて移民へとその立場を変容させていくことになった。その過程ならびに彼らの状況については、早くから社会、労働をはじめとする分野で多数の研究が行われ、報告がなされてきたが、これに対して、この時代のトルコ人労働者が文化面で着目されることは相対的に少なかったと言わざるをえない。その傾向は、とりわけ1960-70年代という在独トルコ人の歴史の初期の時代においては、在独トルコ人がもっぱら労働者として認識される存在であったために顕著になる。

このような観点から、本稿ではトルコ人労働者と文化、とりわけ文学活動を論じている。具体的には、在独トルコ人が現在見られるような移民としてではなく、受入国ドイツのみならず彼ら自身によっても労働者と見なされていた在独トルコ人の初期の時代、具体的には1960年代から70年代のトルコ人労働者と文学の関係を取り扱っている。

第一部は、在独トルコ人社会の形成と、彼らのアイデンティティーを主題としている。まず、第一章では、在独トルコ人の歴史の概要を示している。その中でも、とりわけ在独トルコ人の質的变化に着目し、トルコ人労働者が最初に渡独した60年代から、70年代を経て、ドイツにおける定住化が決定的なものになる80年代前半を観察の対象としている。

1961年の雇用双務協定を契機に、多数のトルコ人労働者がドイツに渡ったが、当初、彼らは短期滞在の労働者に過ぎなかつた。それが、やがて、当初受入国側によって意図されていたいわゆる「ローテーション政策」が破綻し、外国人労働者のドイツにおける滞在の長

期化が見られるようになった。その後、73年の石油危機を契機に、ドイツによるトルコ人労働者の受け入れは停止されるが、すでに入国していたトルコ人はそれ以後もドイツにとどまり続けた。彼らは、やがて家族を呼び寄せ、ドイツに定住化した。この一連の過程は、在独トルコ人の歴史の初期、すなわち60-80年前半において観察された。この期間に、在独トルコ人は、労働者から長期滞在者、定住者、そして在独トルコ人移民へと変容を遂げる。

現在では、在独トルコ人はドイツ社会においてその生活基盤を構築しており、世代交代も進んでいる。彼らの多くは、ドイツに定着し、もはやトルコへの永住帰国を想定していない状況にある。その一方で、彼らはトルコ人としての自己を認識しており、彼らの起源であるトルコとは距離的に隔たっていながらも、文化的、精神的に密接なつながりを維持している。この状況を、本稿ではドイツの「トルコ人ディアスボラ」と規定した。

第二章では、「トルコ人ディアスボラ」に言及する上で不可避である、トルコ人の自己認識、アイデンティティーを取り上げる。在独トルコ人は、自らをトルコ人として認識しているが、その自己認識はトルコ共和国のトルコ人と必ずしも同一ではない。なぜなら、最初に渡独したトルコ人第一世代は、成人して後ドイツ社会との接触を持ったため、トルコ国内のトルコ人と同様のアイデンティティーを保持しえたのに対し、第二世代以降の、子供時代にドイツに連れて来られたり、ドイツで生まれ育った世代は、幼いころからドイツ社会の渦中に身を置かざるをえなくなるからである。このような状況にあって、トルコ人若年層は、在独トルコ人としての新たなアイデンティティーを模索している状況にある。

在独トルコ人のアイデンティティーは、ドイツという異文化社会との接触を契機として発露した。なぜなら、出稼ぎによって故郷とまったく異なる環境に暮らす中では、彼らは、自分が何者であるかを認識することを迫られるからである。故郷であるトルコにとどまる限り、彼らは自らのアイデンティティーを自覚する必要はさほどなかった。そもそも、彼らの「トルコ人のアイデンティティー」自体、トルコ共和国の成立過程において、いわば上から与えられたものであった。しかし、ドイツ社会との接触の中で、ドイツと自分たちとの間の文化的差異や、ドイツ社会からの差別を体験することによって、彼らは必然的に自己認識を迫られることとなった。

異郷と接触することで生じる在独トルコ人のアイデンティティーや *gurbet* という感情、およびそのほかの彼らの経験は、「在独トルコ人文学」として文学に著されることになる。

続く第二部では、「在独トルコ人文学」の先駆的作家三名の活動が主題となっている。文学作品の分析を行う前段階として、まず第三章では、在独トルコ人周辺の文学活動についての概要を示している。「在独トルコ人文学」の出現は早く、雇用双務協定締結の数年後に著されていることが指摘される。その上で、第四章から第六章において、「在独トルコ人文

学」における先駆的存在である、ネヴザト・ウストゥン、ベキル・ユルドゥズ、ユクセル・パザルカヤの作品の分析を行っている。

第四章では、ウストゥンの作品を取り上げている。彼は、65年に「ドイツ　ドイツ」を発表したことを皮切りに、以後、数は少ないながらも「在独トルコ人文学」に属する作品を描いている。彼自身はトルコ人労働者ではないが、最初にトルコ人出稼ぎ労働者を題材とする作品を著したという点で、「在独トルコ人文学」において無視し得ない存在である。

彼の関心は、在独トルコ人の諸状況の中でも、特に「性差の問題」に注がれた。「ドイツ　ドイツ」においては、出稼ぎに赴いた夫をトルコで待つしかない女性の姿が描かれた。その10年後には、彼は「女たちと男たち」や「ある女性」のように、出稼ぎによって自立する女性と、伝統的価値観に固執する男性を描写した作品を発表した。ここで彼は、出稼ぎがトルコ人男女にもたらす影響を鋭く観察し、読者に示している。

また、彼は、ジャーナリストとしての観察眼で、トルコ人労働者の個人的な経験だけではなく、トルコからドイツへの労働者送り出しが及ぼす影響を冷静に観察、分析し、安易な労働力輸出に依存するトルコに警告を発している。以上の点から、彼は「在独トルコ人文学」において、作品数は少ないものの、先駆者としての大きな役割を果たしていると評価される。

第五章では、ユルドゥズの作品の分析を行っている。彼は、実際にトルコ人労働者としてドイツで就労した経験を持つ作家である。このため、彼の描写には、経験者自身の視点が色濃く反映され、60年代当時のトルコ人労働者の状況を知る貴重な資料となるものである。特に、自伝的小説である『ドイツのトルコ人』は、自らの労働者としての経験を、帰国後まもなく著したものである。その内容は多岐に及んでいたため、文学作品として高い評価は得られないものの、一方で当時のトルコ人労働者の姿をリアルに描いている点が評価される。

彼の作品において、ドイツに関する描写はそのほとんどが否定的であることが指摘される。その理由としては、彼がドイツでの就労経験の中で、ドイツに対して否定的見解を抱いてしまったことが推察される。そして、この彼のドイツに対する見方は、『ドイツのトルコ人』以降の作品においても覆されることはない。

また、彼は、『ドイツのトルコ人』の中に描いたのと同じ状況を、後に短編小説において再構成している。トルコ人労働者のドイツでの客死や、ベルトコンベア・システム、ナチズムなどがその例である。このことから、ユルドゥズの「在独トルコ人文学」作品は、いずれも自らの経験および、最初の作品である『ドイツのトルコ人』をベースとしていることが指摘される。

第六章では、パザルカヤの作品分析および活動の評価を行っている。パザルカヤは、本稿で取り上げた3名のうち、唯一存命の作家である。彼は、今までドイツで暮らし、在

独トルコ人と生活をともにしてきた。そのため、彼の作品は、その時代ごとの在独トルコ人の状況、すなわち、短期滞在の労働者から移民化するまでの在独トルコ人の変容過程を如実に反映している。それどころか、彼は第二世代のアイデンティティーのように、定住化が進む在独トルコ人が直面することになる問題を、作品中に先取りし、暗示すらしている。

また、彼は *Anadil* 誌の発行によって、「在独トルコ人文学」作家の結集を試み、二言語テキストの発行という形で、ドイツとトルコの双方向的な交流を在独トルコ人に促した。彼自身は、筆者の質問に対し、作品執筆の目的は優れた文学を書くことであったと述べているが、結果的に彼が在独トルコ人社会での異文化理解に果たした貢献は大きいといわざるをえない。

続く第三部にあたる第七章では、「在独トルコ人問題研究における「在独トルコ人文学」の位置づけを試みている。「在独トルコ人文学」作品の分析により、以下のことが明らかになった。すなわち、「在独トルコ人文学」作品から、過去の在独トルコ人の状況および彼らの関心を知ることが可能になる。「在独トルコ人文学」は文学作品であるため、必ずしも客観的事実だけに基づいてはいないが、そのために、かえってそこから当時の在独トルコ人のおかれた状況、彼らの視点を明瞭にうかがうことができる。

また、「在独トルコ人文学」は、従来の在独トルコ人研究と比較しても、在独トルコ人社会が内包する諸問題に対する先見性が指摘される。在独トルコ人研究は、トルコ人労働者の出現から間もない時期より行われているが、当初は国際労働力の移動の観点で論じられていた。これに対し「在独トルコ人文学」は国際労働力の移動という大局的な事象よりも、トルコ人労働者の個人的経験を多く含むものであるため、在独トルコ人の抱える問題が、より敏感に反映されることとなった。

以上の点から、「在独トルコ人文学」は、在独トルコ人研究の資料としての価値を有していることが指摘される。

本稿の主眼は、主として国際労働移動の領域で論じられてきた 60-80 年代初頭の在独トルコ人について、彼らの文化活動の観察および評価を行うことにある。具体的には、在独トルコ人研究において見落とされてきた「在独トルコ人文学」の存在およびその内容を明らかにするとともに、在独トルコ人研究資料としての「在独トルコ人文学」の価値を示すことを試みた。今後は、他の作家、他の時代の「在独トルコ人文学」作品の分析に着手し、約 40 年にわたる在独トルコ人の歴史と、「在独トルコ人文学」の描写とのさらなる比較対照を行う必要がある。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、1961年にトルコー西ドイツ（当時）間で締結された雇用双務協定の結果、ドイツに出現した200万人以上に達する大規模な少数派である在独トルコ人に関し、60-80年代初頭にかけて労働者から移民へと変容していく過程を、在独トルコ人文学に属する作品群の分析をおして検証するものである。

より具体的には、外国人労働者問題、国際労働移動、移民問題などの観点における社会科学的分野の先行研究に対して、在独トルコ人文学の存在とその規模を明らかにし、在独トルコ人文学の研究資料としての価値を論ずるとともに、社会科学の諸分野からの研究成果との関連で、同文学研究が貢献可能な論点を明らかにすることを目指した。このため、方法論的には、先行する社会科学的研究に依拠しつつも、主として文学研究の手法（作品論、作家論、テーマ分析等）を用いている。また、以上の分析において、従来、ドイツにおいては「移民文学」や「外国人文学」等として扱われてきた在独トルコ人文学を、ホスト国たるドイツにおけるトルコ人コミュニティーの規模とその文学活動の範囲を考慮し、在独の「トルコ人ディアスボラ文学」と捉え、その研究の端緒を切り拓くことを企図した。

本論文は、まず問題の所在を述べ先行研究による成果を確認した後（序章）、外国人労働者としてトルコ人が渡独する60年代から定住の傾向が顕著となりトルコ人移民が「出現」する80年代初頭までの時期を、ドイツの労働政策・移民政策との関連で分析し（第一章）、異郷たる異文化社会に直面する中で、トルコ共和国成立後に上から与えられ希薄であった「トルコ人意識」が刺激され、帰属意識問題が言語・宗教文化・国・居住地域等の間で揺れ動くとともに、世代間でアイデンティティーが多様化する現象を論じた（第二章）。

この自己認識の変容の過程が、早くも60年代中期に出現し現在まで続く「在独トルコ人文学」の作品群の分析により抽出可能であり、従来の社会科学的研究の成果と照合しうるとの立場から、今までほとんど注目されてこなかった彼らの文学活動に焦点を当てて研究することの重要性を論じ、主たる執筆動機としてgurbet (= 異郷意識) を指摘した（第三章）。

続く四一六章では、研究対象とする時期に作品を発表した作家3名による作品の分析を行っている。ジャーナリストたるウストゥン（第四章）は、ドイツで働くトルコ人労働者を中心アジアから「移動」し続けるトルコ民族の一部たる「ドイツのトルコ人」と捉え、彼らの帰属意識、国籍問題、家族問題等を描く。中でも家族と別離した男女の出稼ぎ労働者が異郷でドイツ人との接触が深まった結果、女性を被害者として起こる殺人事件を扱う作品の分析で男女間意識たる「性差の問題」への作家の強い関心を指摘し、トルコ本国の作家たちが正面から取り組めないテーマに取り組んだことを高く評価した。

ドイツでの就労経験を持つユルドゥズ（第五章）の作品分析では、労働と日常生活のあらゆる側面で社会規範・価値観・宗教の相違に悩み、ドイツに対する否定的見解を引きずり続ける作家の姿を抽出している。この作家が客死、労働システム、ナチズムのテーマをめぐる作品の再構成にこだわり続けたことを指摘し、異郷たるホスト国ドイツがトルコ人労働者にどのように映ったかを示唆する、具体的で細部にわたる記録とみなしうることを論じた。

ドイツに留学し今日まで同国で文学活動を続けるパザルカヤ（第六章）に関しては、両国の相違を熟知する知識人による文学活動として捉え、時代の経過に沿って出稼ぎから定住化するまでの変容過程を詳細に描き作品化していることを論証した。同時に、この作家が文学誌『Anadil(母語)』の発行により「在独トルコ人文学」作家の結集を図ったこと、トルコ語・ドイツ語の二言語による編集で両文化間における双方向的な理解と交流に努めたことを指摘した。

これらの「在独トルコ人文学」作家と作品群の研究がトルコ人移民研究に貢献しうる可能性とその射程を論じて（第七章）筆者は、当事者による発信を続けるこの文学の総体を「トルコ人ディアスボラ文学」と捉え、在独トルコ人とその社会が抱える問題のほぼ同時代的な証言ないし記録とし

て貴重な資料となりうること、また「生身の人間」を描く文学作品の分析が、社会科学的研究の成果に対して相補的・補完的な立場から具体的でリアルな論点を提供しうること、この意味で「トルコ人ディアスボラ文学研究」が持つ大きな意義と重要性を力説している。

このように、本論文は本格的な「在独トルコ人文学」研究に正面から取り組んだ点、従来の社会科学的研究の論点を文学作品の中から詳細に跡付けた点などは高く評価できる。しかし、第1にトルコとドイツの両社会や文壇における在独トルコ人文学の全体的な位置づけへの視点が弱いこと、第2に、ドイツの移民政策や統合政策の変遷とその影響に関する当事者による一次資料と見なすにしても、厳密な時期区分論や歴史的分析との対応関係において論ずる必要があること、第3に、術語や概念の定義と検証に若干の甘さがあり、より的確な表現が必要な場合も散見されること、第4に、文学作品の分析により得られる成果と資料的価値を論ずるに際して、現実との時間差や象徴化など文学的フィルターを取り外しても有効であることを明瞭に論ずる必要があること、第5に、作家パザルカヤから筆者への返信にあるように、作家の創作目的が「在独トルコ人」を描くというより「あくまでもすぐれた文学作品を書くこと」にあるとの捉え方が弱く、結果的に文学論としてもいくぶん偏りが残ったこと、などを指摘せざるを得ない。

にもかかわらず、ほぼ未開拓と言える文学作品群を詳細に分析し文学的位置づけや評価に取り組んだことは、この分野における研究の多様化と深化を立証する貴重な貢献と見なさねばならない。背景の異なる3人の作家の文学作品の分析から手堅く実証した在独トルコ人の意識の変容の詳細は、意義深いものである。また、ドイツ社会の一部を確かに構成しながらも文化的異質性の自覚を持続するこの文学の中から、新たな文学的活力が生み出されてくる可能性さえ示唆される。したがって、こうした作品群を生み出す背景にトルコ人ディアスボラの存在を抜きにしてはありえないとの観点から「トルコ人ディアスボラ文学」と命名したことは慧眼ともいいうべきであろう。他の時代・地域における同種の「ディアスボラ文学」群との比較研究への視点を筆者は獲得しつつあり、この研究が大きな可能性を秘めていることを強く指摘したい。

以上から、本審査委員会は、本研究が博士の学位を授与するにふさわしい業績であるとの評価で一致し、別紙記載の結論を得た。